

性教育の現状と課題 (I)

——性教育の変遷と現状——

平林 宏美*

はじめに

わが国において性教育が学校教育の中に位置づけられたのは、戦後の男女間の道徳の低下や青少年の不良化、性病の蔓延が民族的な危機を招くと喧伝され、1947年(昭和22年)に「学校体育指導要綱」が出されてからである。

それ以降、性の開放による性についての価値観の多様化や女性の性の解放とかかわって性教育に対する考え方や教育内容や方法が変容してきた。

特に、1990年代にはいってからは、エイズ問題とかかわって性教育の必要性が強調され、学習指導要領の改訂によって小学校の理科と保健の教科書にも性に関する指導内容が組み込まれるようになった。

このようななかで、社会や子どものニーズに応えることができる性教育をどのように構築していったらよいのかという課題意識を持ち、その課題を追究するための手がかりとして性教育の変遷と現状を分析する事が本稿の目的である。

I 戦後における性教育の変遷の概要

1 純潔教育の時代

戦後、わが国において性に関する教育の必要性が提唱されたのは、1947年(昭和22年)1月に

「純潔教育の実施について」という通達が文部省社会教育局長名で各都道府県に対して出されてからである。この通達が出された背景には、敗戦後の治安対策として1946年(昭和21年)11月に報告された「私娼の取締並びに発生の防止及び保護対策」であった。その中には、「正しい男女間の交際の指導、性道徳の昂揚を図ること、青年男女の健全な思想を涵養するするための措置を講ずること」などが強調されている。そして、1947年(昭和22年)6月に「学校体育指導要綱」が出され、性教育が学校教育の中にはじめて位置づけられた。

その後、1949年(昭和24年)2月に「純潔教育基本要項」が発表され、戦後の純潔教育の考え方が提起された。このなかで「純潔」について次のように述べている。「純潔とは、男女間の肉体的関係が結婚当事者間のみに行われることを意味し、したがって結婚関係以外の性的関係を行わないこと、および性病罹患のないことを条件とし、純潔教育はこの条件に合致するように指導し、啓蒙すること」また、性教育と純潔教育の区別を次のように述べている。「純潔とは性的純潔の意であって、男女間の肉体的関係が性道徳の定むる基準に合致するをいい、純潔教育とは、純潔の意義とその実行方法を教えることをいうのであります。したがって、純潔教育は性教育の一部(主として性道徳)を教育の対象とするものであります。」

1955年(昭和30年)には「純潔教育の普及徹底に関する建議」「純潔教育の進め方(試案)」が文

*〒380 長野市三輪8-49-7 長野県短期大学

部大臣に提出されるなど、純潔教育の普及に対する努力が行われた。1960年代（昭和40年代）前半までは社会教育はもちろんのこと学校教育の現場においても「純潔教育」の用語が多く使用されていた。

学校における「保健」を中心とした性教育の変遷を見ると1947年（昭和22年）に発表された「中学校保健計画実施要綱（文部省試案）」では、性教育を健康教育の内容とし、「成熟期への到達」という単元で扱う案が提示された。これが具体化されたのは1949年（昭和24年）で新制中学校の教科名が「体育」から「保健体育」に改められ、健康教育の中に「成熟期への到達」の章がもうけられてからである。新制高校においても「体育」が「保健体育」に改められ、「保健」の中に「成熟期への到達」が位置づけられた。

「成熟期への到達」の指導目標は、次のように示されている。

- (1) 青年期の発達の種々相について理解を深める。
- (2) 青年期に通常起こる多くの欲望、衝動及び感情に対する健全な構えを与える。
- (3) 遺伝、子孫の永続及び子孫の向上発展に関する事実についての理解を与える。

指導内容として次の項目が示されている。

- (1) 成熟の課程について
- (2) 青年期に起きる身体上の変化について
- (3) どうして子孫を永続させるか、また、この問題についてわれわれが知っておくべきことからは何か

1950年（昭和25年）には「小学校保健計画実施要綱」が出され、(1)身体の成長および発達(2)清潔(3)精神の衛生、などの性教育に関係した内容が示されている。

1951年（昭和26年）には中学生、高校生を対象にした「成熟期への到達」の内容が含まれた教科書が採用されるようになった。

しかし当時の教育現場の認識とのズレがあり、

教科書にある性器の図を問題視したり、「寝た子を起こすことになる」という反発が強くあった。このようななかで、1958年（昭和33年）に出された「中学校学習指導要領」から「成熟期への到達」が削除され、「指導上の留意事項」として「心身の発達、病気の予防、精神衛生などの学習においては、性教育を考慮して指導する」と述べるにとどまってしまった。

1969年（昭和44年）の「学習指導要領」の改訂では「内容の取り扱い」として「性に関する内容は、心身の発達における男女差を正しく理解することを中心に、効果的に取り扱うものとする」という表現にとどまってしまった。

1977年（昭和52年）の「学習指導要領」の改訂においては1947年（昭和22年）に示された「性教育」という文言や「性に関する指導」という表現は「学習指導要領」からはなくなり、中学校の「学級指導」の内容として「健康と安全に関すること」のなかで性の発達を取り上げるように示されるにすぎなくなってしまった。

このように1940年代後半から1960年代後半における「純潔教育」と「成熟期への到達」は、戦後の性教育の啓蒙にはなったが、時代の変化や学校現場の実態の問題のために目的を十分達成できずに1970年代を迎えることになった。

2 純潔教育から性教育の時代

1970年（昭和45年）頃から、次第に性の開放や女性の性の解放についての思潮が広がってくるにしたがって、「純潔」という言葉に対しての反発が強くなってきた。「純潔」という言葉には、性を抑圧してきた禁欲思想や女性の性にだけ貞節を押しつける「性に関する二重の基準」が含まれていると言った批判が強くなり、「純潔教育」と言う用語が「性教育」と言う用語に替わって使われるようになってきた。

朝山新一は1967年（昭和42年）に著書「性教

育¹⁾で「純潔教育という言葉で表したのはすこしまずかった。その教育が古い性観念を打破して、新しい性の見方と封建的な性道徳から脱皮した人間をつくる目的で計画される以上、古い人間の頭に取りついた性観念を考慮する必要などさらさらなかったはずだ。まっさきに純潔という観念にまつわりついてはなれなかった従来の肉体中心の処女性尊重思想と、因循な精神と主体性のない男性従属の性道徳を破棄するためにも、そういうあいまいな表現をさけるべきであった」また「アメリカ、北欧、西欧にみられる自由な性の現実を旧道徳の感覚で、慣習的に性の退廃という言葉で非難し去るのはあまりに単純すぎる態度であろう。性は人間のこれまでの歴史になかった仕方で肉体から解き放され、あらたに精神の領域に歩みよろうとしていることに気づかなければならない」と主張し、純潔教育は「とうてい男女の社会的人権の平等がうたわれている時代の教育ではない」と批判している。

また、村松博雄は、1970年（昭和45年）に著書「これからの性教育²⁾」で「現代の性教育の課題は、これまで、いろいろなしきたり、社会道徳で束縛されていた人間の性をどのような形で解放するかにつきる。性の解放はさしあたり、現代女性の地位の向上運動につながるものと考えていい」と述べている。

このような批判のなかで文部省は1972年（昭和47年）3月に「純潔教育と性教育とは、本来、その意義・理念、つまり目的および内容が異なるものではないと考えています。よって、今後は、純潔教育と性教育が同義語であるとの見解にたつて事務を進めることにします」という通達を出した。

1970年代にはいると、人間の性についての捉え方が、妊娠・出産という性の生物学的な側面だけでなく、また、禁欲的な性道徳から解放するといった捉え方が広まり、性教育のあり方も強く影響しはじめた。性教育の研究と実践が強く要請さ

れはじめたもう一方の背景には、子どもをとりまく性文化や性風俗の開放が急速に進み、青少年の性意識や性行動に大きな影響を与えはじめたことにある。高校生と大学生の性交経験者が大幅に増加し、それにともなって10代の女子の人工妊娠中絶が増加するとともに女子高校生の売春が社会の問題とされはじめたことにもある。³⁾

このような状況のなかで文部省は学習指導要領の中に性教育を位置づけなかったのである。そこで各都道府県や市の教育委員会においては必要に迫られて「性教育の手引き」や「性教育の指導資料」を作成し、学校現場に配布するところが多くなってきたのである。

その後、1986年（昭和61年）に文部省が「生徒指導における性に関する指導」を発行したことから多くの都道府県や市の教育委員会においては「性教育の手引き」の改訂版を発行するようになり、学校現場においても性教育の実践が徐々にではあるが行われるようになってきた。

3 多様な性教育実践の時代

1980年代後半になり、子どもたちをめぐる性的状況は、歪んだ性情報の氾濫によって1980年代前半とは較べものならないほど厳しい状況になってきた。特に中・高校生の不純異性行為性行為、売春、婦女暴行、望まない妊娠・中絶などいわゆる「性非行」と呼ばれる性的な行為が増加しはじめたこと。（中・高校生の性的な性的問題行動は、大人の性行動や性文化や人間関係に見られる問題の反映であるが）家庭内暴力、校内暴力、受験戦争、登校拒否、いじめの横行などが増加しはじめたこと。などによって、学校現場においては、性教育をせざるをえない状況に迫られてしまったのである。

このような状況に置ける学校現場の性教育は、「性非行対策としての性教育」が特徴的であったように思われる。ともあれ、学校現場において性

教育の実践がめだちはじめ、各種の性教育の研究団体が発足した。また、新聞、雑誌、テレビなどのマスコミも性の話題や情報を多く伝達しはじめた。性教育に関する書籍の発刊も多くなった。

4 学習指導要領の改訂と性教育

1989年（平成1年）の学習指導要領の改訂によって小学校3年生から6年生の理科の教科書に「人体の学習」が位置づけられた。また、小学校5年生の保健の教科書に「身体の発育と心の発達」が位置づけられた。いずれも性に関わる学習が重要な課題となり、性に関わる学習内容が小学校の教科書に位置づけられたのは、今回の改訂がはじめてである。

現在使用されている教科書を分析すると次のような問題点を指摘することができる。

5 小学校5年理科の教科書の問題点

(1) 学習指導要領の「人体の学習」

1989年の学習指導要領の改訂によって、小学校3年生から6年生までの理科の教科書に位置づけられた「人体の学習」の内容は、次の通りである。

3年生では、目・耳・皮膚と骨・筋肉、4年生では、脈拍・体温等、人の活動と環境、5年生では、人の発生と成長、6年生では、呼吸・消化・排泄・循環と人間と周囲の環境について教えることになっている。

これらの内容が、3年生から位置づけられたという事は、改訂前の理科学習では「人体の学習」が6年生だけであったことを考えると一步前進であると思われる。

しかし、これらの内容が、人間のからだやくらしの学習をするうえで、その科学性、系統性、子どもの認識の順次性や要求に合致しているか、という観点から検討するとき、さまざまな問題点があるように思われる。

人間のからだやくらしの学習においては、「個

体維持」に必要な感覚器官・運動器官・消化器官・循環器官・排泄器官などの学習と「種族維持」に必要な生殖器官についての学習という、二つの重要な観点で学習を組織してこそ、科学的で系統的な学習が成立するのである。つまり、人間を含めて動物のからだづくりの学習においては、その「個体維持」についての科学的な認識と「種族維持」についての科学的な認識の両側面に関する理解と認識を、子どもたちに保障できるような内容と方法が重要なのである。

しかし、改訂された学習指導要領や指導書や教科書では、先に述べた観点で人間のからだやくらしについての子どもの理解や認識が深められるかどうかということについては、疑問に思う点を多く指摘することができる。

以上のような問題意識と性教育という観点から新学習指導要領に基づいてつくられた5年生の教科書の「人の発生と成長」について検討してみたいと思う。

(2) 「人の発生と成長」

新学習指導要領の5年生の「内容」には次のように記述されている。

A 生物とその環境

(3) 人と他の動物を比較したり資料を活用したりして、人の発生や成長などを調べることができるようにする。

ア 人は、男女によって体のつくりなどに特徴があること。

イ 人は、母体内で成長して生まれること。

また、「内容の取り扱い」においては、「アについては、男女の外部形態の違いのほか、母体内での受精にふれること。その際、精子や卵子の生成過程は取り上げないこと。」と述べられている。

このような学習指導要領に基づいて信濃教育会出版（以下 信教と記す）、東京書籍（以下 東書と記す）、大日本図書（以下 大日と記す）、学

習研究社 (以下 学研と記す), 学校図書 (以下 学図と記す), 啓林館 (以下 啓林と記す) 教育出版社 (以下 教出と記す) の教科書会社が「自主規制」をして教科書をつくり, 文部省の「検定」をパスしている。上記七社の内容を注意深く検討すると次のような問題点を指摘することができる。

a 単元構成

a) 動物との対比のさせ方

信教, 東書, 大日, 啓林は, 動物の発生・成長を扱ってから, ヒトの発生・成長に導いている。学研, 学図, 教出は, ヒトの発生・成長を主とし, 常に動物と比較しながら学習を進めるように構成している。後者の構成の手法は, 時には有効であるが, 子どもたちが混乱する恐れがあるように思われる。

それは, ヒトの学習を進める場合には, 生物界の一員としてのヒトを科学的に理解する側面とヒト自身についての認識を深めるという両側面からの学習が重要だからである。

このことからすると, 前者のように, 動物の「種族維持」についての学習をした後に, その学習を生かした, ヒトの「種族維持」の学習へ発展させる方が有効であると思われる。その際, 動物の進化を土台とした分類学的な観点での学習, つまり, 魚類→両生類→爬虫類→鳥類→哺乳類という順序でそれぞれの生殖方法・発生・成長についての学習を組織することが重要であると思われる。

b) 「ヒトの発生と成長」についての学習の順序性について

学習の順序性については, 以下の四種類に分類することができる。

- ① 受精→胎児の成長→誕生→男女のからだの違い (信教, 啓林, 教出)
- ② 男女の体の違い→受精→胎児の成長→誕生 (東書, 大日)

③ 誕生→胎児の成長→受精→男女の体の違い→生命の連続性 (学研)

④ 生命の連続性→男女の体の違い→受精→胎児の成長→誕生 (学図)

以上の四種類ともそれぞれの論理とストーリーを考えているが, ヒトの発生と誕生の学習において決定的に重要な「性交」と「性器」についての記述を避けているために, 学習の順序性を組み立てるのに無理が生じているのではなからうか。

副読本『ひとりで, ふたりで, みんなと』(東書, 山本直英・高柳美知子監修) では, 生物の種族保存→動物の抱接・交尾→人間の種族保存→性交・避妊→受精→胎児の成長→誕生→男女の体の違い→男女の性器 (外性器, 内性器, 月経, 精通など) の順序で学習を展開させようとしている。

前七社と比べてみると後者のほうが自然であり, 科学的であり, 系統的である。

b 動物の抱接・交尾・受精について

各社とも動物の種族保存の方法について扱っているが, 前述のように進化を土台とした分類学的な観点があいまいなため, 次のような問題点を指摘することができる。

- ①抱接 (両生類) と交尾 (鳥類・哺乳類) の区別が不明確。
- ②体外受精 (魚類・両生類) と体内受精 (爬虫類・鳥類・哺乳類) の区別が不明確。
- ③卵生 (哺乳類以外) と胎生 (哺乳類) の区別が不明確。

動物の進化とそれぞれの動物の「種族維持」のための類ごとの原理とその意味と努力について学ぶことは, 動物の全体を類としてとらえ, そのなかの一員であるヒトの学習には欠かせないとともに, 子どもたちが身近な動物を見直すために重要な学習内容である。

c ヒトの性交・受精について

七社とも「性交」についての記述はまったくなく、「受精」のみが記述されており、子どもたちは「性交なき受精」を学ぶことになる。

また、「受精」についても次のように不正確で不十分な記述となっている。

信教「ひと男の精子と女の卵子が受精して新しい生命を受け継いでいます。」

東書「卵子と精子が女性のからだの中で結びつく（受精する）とひとのせいめいがたんじょうする。」

大日「男子の体に精子をつくるための仕組みがあり、女子には卵子をつくったり、受精した卵子を育てる仕組みがある。」

学図「卵子は、卵巣の外に出され子宮に向かう途中で精子と結合（受精）することによって新しい生命が誕生する。」

啓林「男子から出される精子が女子の子宮の奥の管で卵（卵子という）とであって受精する。」

学研「胎児のもとはお母さんの体の中でつくられる卵子とお父さんの体の中でつくられる精子とが結びついてできる。」

教出「人の父親の精巣でつくられる精子が母親の卵巣でつくられる卵子と母親の体内で受精し、子宮の中で受精卵が成長をはじめる。」

以上のような記述であり、これでは「男の精子がどこからどのようにして、女の卵管に届けられるのか」とか「受精する場所や胎児が成長する場所はどこなのか」という子どもたちの質問には答えられないことになる。

また、学研と教出が「お父さん」「父親」の体と精巣、「お母さん」「母親」の体と卵巣、という表現をしているが、これだと“父と母にならないと精子も卵子もつukれない”ことになってしまうし、“受精し、妊娠し、出産する前にすでに父や母になっている”ことについて、どのように説明するのであろうか。

このような不正確で不十分な記述にならざるを得ないのは、「性器」と「性交」についての記述を避けているからであろう。

d 男女の体の違いについて

各社とも男女のからだの図を掲載しているが、卵巣・子宮や精巣などの内性器の説明はあるが、ワギナ・ペニスなどの外性器についての説明は全く欠落させている。

また、学図は、「生まれたばかりの赤ちゃんでは、男女でそれぞれ性器にちがいが見られるが、他の体つきはほとんど同じである。」と記述し、教出では「男と女とでは、生まれたときから外性器のつくりがちがいがみられるが、大人になるにつれて、体つきのちがいははっきりとしてくる。」と記述されているが、他の五社では「性器、外性器」の文字すら記述がない。

e 胎児の成長と誕生について

各社とも「子宮内胎児」の成長過程を大きな写真や絵で多くのページ数を使って説明しているが、これには次のような問題点があるように思われる。

① 学研、学図だけが「胎児」という表現をしているが、他社は「子」「子ども」という表現になっている。「胎児」が科学的であり、正確な表現であろう。

② 大日以外は「へそのお」「胎盤」についての記述があり、「羊水」については大日、学図、啓林の三社が記述されているが、不正確で不十分な記述のため「へそのおを流れている血は誰の血液か」とか「胎児の排泄」についての子どもたちの質問には答えられないであろう。

③ 子宮内における胎児の成長過程（個体発生）の中で動物の系統発生を短時間で繰り返しているという「反復説」に基づいた観察や理解が必要なのではないであろうか。進化という観点では重要であると思われる。

④ 誕生については、「どこからどのようにして出産してくるのか」についての記述が不明確であり、「産声」については、学図だけ、「呼吸」については信教だけが記述されている。

各社の記述に詳細な比較については表1にまとめられている。(197～198ページ参照)

(3) 教科書の問題点を乗り越えるために

教科書は主要な教材であり、学習活動のなかでは、教科書の不十分で不明確な部分や問題点を子どもたちとともに補足し、乗り越えてこそ、子どもたちの科学的な認識を深めていくことができるのである。

このような考え方で学習を組織していくに当たっては、前述した問題点を乗り越えるとともに、次のようなことについても留意しておく必要があるように思われる。

a 「生命尊重主義」や「生命の連続性」の強調と関わって

① 生命誕生の「神秘」「不思議」「奇跡」についての必要以上の強調によって、妊娠や出産の科学的な学習が希薄になってしまう恐れがあるように思われる。生命誕生を科学的にみつめさせることによる感動を子どもたちに味わわせたいものである。

② 「生命に連続性」の強調によって「女は、子を産むのが当たり前である」という考え方に偏りやすくなるのではなかろうか。また、そのことによって「産む・産まないは個人の選択の自由」であることを束縛することになりはしないであろうか。

(b) 「母性尊重主義」の強調とかかわって

① 妊娠や出産・誕生の学習において母親の胎児への心配、不安、苦勞、愛情について子どもたちに認識させる必要はあるが、出産にあたっての母

親の苦勞話の必要以上の強調は、「出産における胎児の能動的な活動（陣痛を促す胎児の活動等）」についての学習が希薄になる恐れがある。

② 「母性尊重主義」の強調により「母性本能論」や「育児天職論」の押しつけになる恐れがあるのではなかろうか。母性は、本能ではなく、育てるもの、育つもの、獲得されていくものであると考えたい。

以上の点については、現代社会における性差別観・性別役割分業観を払拭するためにも重要な観点である。

「人の発生と成長」の学習に当たっては、以上のいくつかの重要な観点を欠落させることなく、思春期を迎えようとしている小学校高学年の子どもたちに「性的自己決定能力」培っていききたいものである。

6 中学校「保健」の教科書の検討

(1) 「保健」分野の目標と内容

新学習要領における中学校保健体育科の「保健」分野の目標は、

1) 心身の発達や心の健康及び健康と生活について理解させ、合理的に健康を保持増進することができる能力と態度を育てる。

2) 健康と環境とのかかわりについて理解させ、健康に適した環境の維持や改善を図ることができる能力を育てる。

3) 傷害の防止と疾病の予防についての理解を深めさせるとともに、応急処置の基礎的技能を修得させ、これらを実践できる能力と態度を育てるとされている。

そして、内容としては、目標の(1)を受けて「心身の機能の発達と心の健康」と「健康と生活」とし、目標(2)を受けて「健康と環境」とし、目標(3)を受けて「傷害の防止」と「疾病の予防」となっている。

以上の目標と内容の中で、人間の性にかかわる

ものは、「心身の機能の発達と心の健康」である。そして、そこにおいて理解させる内容として次のように示されている。

ア 身体の機能は年齢とともに発達し、また二次性徴は身体の発達とそれに伴う内分泌の働きによって現れること。

イ 知的機能、情意機能、社会性などの精神機能は、生活経験などの影響を受けて発達し、また、思春期においては、自己の認識が深まり、自己形成がなされること。

ウ 心の健康を保つには、欲求に適切に対処するなどの心身の調和を保つことが大切であること。また、欲求への対処の仕方に応じて、精神的、身体的に様々な影響が生じること。

新学習指導要領に示されている、以上のような目標と指導内容に基づいて、各教科書会社が教科書を編纂し、文部省の検定をパスしたものが子どもたちの手元に渡され、子どもたちの自己変革や自己形成のための重要な教材として使用されるのである。

これらの教科書が、思春期を迎えた中学生に「心身の機能の発達と心の健康」についての科学的な認識を深められるかという点について、次の観点で検討してみたいと思う。

〈検討の観点〉

① 「第二の誕生」ともいわれる思春期の子どもたちが、「人間の生と性」についての科学的な認識やヒューマンな考え方を育てる内容になっているか。

② 子どもニーズや社会のニーズに応えうる内容になっているか。

以上のような観点で、学研、東京書籍、大日本図書の教科書を検討してみたいと思う。

(2) 各社教科書の単元構成

〈学研〉カッコ内は記述ページ数（以下同じ）

「からだの発達」

- 1 中学生期のからだの発達の特徴（2）
- 2 呼吸器のしくみとその発達（2）
- 3 循環器のしくみとその発達（2）
- 4 脳と神経機能の発達（2）
- 5 二次性徴の発現(1)（2）
- 6 二次性徴の発現(2)（2）

「精神の発達と心の健康」

- 1 精神の発達のしかた（2）
- 2 中学生期の精神発達の特徴と自己形成（2）
- 3 欲求と心の健康（2）
- 4 心身の相関と健康（2）

〈東京書籍〉

- 1 からだの発達と二次性徴
 - ①からだの発育・発達（2）
 - ②二次性徴の発現（4）
- 2 心の発達
 - ①言葉の発達と知的機能（2）
 - ②感情と意志の発達（2）
 - ③社会性の発達（2）
- 3 ①欲求の発達（2）
 - ②困難をのりきる力（2）
 - ③心とからだのかかわり（2）

〈大日本図書〉

「からだのはたらきの発達」

- 1 からだのはたらきと年齢による変化（3）
- 2 二次性徴のあらわれと生殖器官の成熟（5）

「心のはたらきの発達」

- 1 脳と心（5）
- 2 心の健康（2）

(3) 「二次性徴」について

各社とも「二次性徴の発現（あらわれ）」については、性ホルモンの分泌によって、からだつぎの変化や、射精や月経という生理現象が始まると

表1 小学校理科教科書の比較 (5年「生物とその環境」)

出版社	信濃教育会	東京書籍	大日本図書	学 研
単元名	生命の発生とたん生	動物と人のたん生	動物や人のたんじょう	人と動物のたん生
単元構成	<p>1. 動物の新しい生命はどのように受け継がれていくのか。</p> <p>2. 動物の新しい生命はどのように育っていくのか。</p> <p>3. ひとの新しい生命は母体内でどのように育って、生まれるのだろうか。</p> <p>4. 動物のおすとめすやひとの男女のからだのようすを比べる。 (動物→人間) (6 P)</p>	<p>1. 動物はどんなすがたでうまれるか。</p> <p>2. 動物のめすとおすと生命のたんじょう</p> <p>3. 人の女性と男性と生命のたんじょう</p> <p>4. 人はどのようにして母体内で育つか。 (動物→人間) (9 P)</p>	<p>1. 動物のたんじょう</p> <p>2. 人の成長とたんじょう (動物→人間) (11 P)</p>	<p>1. 新しい生命のたん生 (1)お母さんのおなかの中にいる赤ちゃんのようすを模型で調べよう。 (2)胎児はどのようにして養分をとるのだろうか。 (3)胎児はお母さんのおなかの中でどのように育つのだろうか。 卵子はこのままで胎児に育つのだろうか。</p> <p>2. 男女の体 (4)男女の体について調べよう。 人の生命のつながり (人を主にして動物と比較) (15 P)</p>
動物の生命の誕生 (交尾・受精について)	おすのからだのできた精子とめすのからだのできた卵子がめすの体内でいっしょになると新しい生命が発生します。	<ul style="list-style-type: none"> ・めすの卵とおすの精子が結びつく。 ・めすがおすの体内に精子を送り… 	おすとめすが交尾すると、おすのからだの中の精子がめすのからだの卵といっしょになる (犬の交尾の図)。	親 おす (精子) 受精卵 めす (卵子)
人間の生命の誕生	ひと、男の精子と女の卵子が受精して新しい生命を受け継いでいきます。	卵子と精子が女性のかからだの中で結びつく (受精する) と人の生命がたんじょうする。	男子の体に精子をつくるためのしくみがあり、女子には卵子をつくったり受精した卵子を育てるしくみがある。	胎児のもとはお母さんの体の中でつくられる卵子とお父さんの体の中でつくられる精子とが結びついてできる。
人の成長	<ul style="list-style-type: none"> ・人の新しい生命は、母親の体内の子宮という部屋の中で、水のようなもの (羊水) で守られて育ちます。 ・子宮の中には胎盤があり、子どもの体はへそのおで胎盤とつながっています。 ・子どもが育つために必要な養分などは、胎盤とへそのおを通して母親の体から子どもの体へ送り込まれ、子どもの体でいらなくなったものは母親の体へ送り出されます。 ・ひとは生まれてから鼻で呼吸し、母親のちぶさから口で養分をとって成長します。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子宮の中で子どもに育っていく。 ・へそのおを通して、母親から養分や酸素をもらって育つ。 ・へそのおは子宮のかべにある胎盤につながっている。 ・およそ10カ月 (280日ぐらい) ほどたつと子ども (赤ちゃん) は母親の体から生まれ出てくる (胎盤の図と説明はあるが羊水はない)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子宮の中の子どもはへそのおで母親とつながっている。 ・子どもはへそのおを通して成長に必要な養分などを母親から取りこんでいる。 ・へそは、へそのおがとれたあとである。 ・卵子から赤ちゃんで生まれるまでにはお母さんのおなかの中に9カ月もいるんだ (胎盤・羊水の説明なし)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎児にはへそのおがあり、子宮についている胎盤とつながっている。子宮の中には、特別な水 (羊水) が満ちている。この水の中で胎児は安全に守られて成長する。 ・約280日間、胎児は胎盤を通してお母さんから必要な養分を受けとり、また、いらなくなったものをお母さんに返している。 ・人の胎児はお母さんのおなかの中でおよそ280日育つ。 ・氷のうで、水・人形入りの「赤ちゃんのへや」づくり。
人の男女のからだのちがいがい	<ul style="list-style-type: none"> ・人の体は、おとなになるにつれて、男の精のうでは精子が、女の卵巣では卵子がつくられるようになり、新しい生命を伝える準備ができています。 ・生まれてくる子どもをちちで育てることができるようにな女のちぶさは大きくなっていきます。 ・男女のからだつきや体のつくりは、新しい生命を親から子へと伝えていくことなどに関係があります。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体の形で違うところはどんなところだろう。 ・「まとめてみよう」で「人の男女のからだのつくりは、どんなちがいがあるか」 	<ul style="list-style-type: none"> ・大人の男子は筋肉が発達し、からだ全体ががっちりしている。また、声が高く、のどぼとけが出ている。 ・大人の女子は全体が丸みを持ったからだつきで、乳房がふくらみ、子どもをうみ、育てるためのからだのしくみがそなわっている。 ・男女の体には、精子をつくるためのしくみがあり、女子には、卵子をつくったり、受精した卵子を育てるしくみがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・男は体全体ががっちりした体つきになる。女は全体がふっくらして、赤ちゃんを育てるためにむねが大きくなる。 ・人も動物も男女の体は、精子が卵子がつくられるころから外見にも違いが現われてくる。
図	精そう、卵巣のみでペニス、バギナ、子宮の説明なし。	卵巣、子宮、精そうのみでペニス、バギナの説明なし。	卵巣、子宮、精そうのみでペニス、バギナの説明なし。	卵巣、子宮、精そうのみでペニス、バギナの説明なし。

学校図書	啓体館	教育出版
生命のつながり	ヒトや動物のたんじょう	人のたん生
1. おすとめすの体の特ちょう 2. 生命のはじまり 3. 母親の体内で成長 (人間主体) (8 P)	1. 動物のたんじょう 2. ヒトのたんじょう (動物→人間) (9 P)	・子は母親の体の中でどのように育っていくのだろうか。 ・男と女は、体のつくりにどのようなちがいがあるのだろうか。 (人間主体) (10 P)
(記述なし)	卵が、おすの体から送られた精子と出合って受精する。	(記述なし)
卵子は卵そうの外に出され子宮に向かう途中で精子と結合(受精)することによって新しい生命がたん生する。	男子から出される精子が女子の子宮のおくの管で卵(卵子という)と出合って受精する。	人の場合も父親の精巣でつくられる精子が母親の卵巣でつくられる卵子と母親の体内で受精し…
・受精後、子宮にたどりついた受精卵は成長をはじめ、1～2カ月の間に人らしい形になっていく。これを胎児という。 ・約280日間、胎児は母親の体内で育てられようやく誕生する。この時胎児の身長は約50cm、体重は約3kgになっている。 ・へそのおは胎盤とつながっていて、母親は胎児が育つための養分などを通してそれを受け取っている。また同時に胎児の体の中でいらなくなったのも、胎児はへそのおを通して胎盤に送り、母親の体へ戻している。 ・胎児は誕生と同時にうぶ声を上げ、自分で呼吸を始める。 (羊水ふれない)	・子どもは母親の体の中では母親の血液から養分や酸素をもらって育つ。 ・へそのおは胎盤につながっていて栄養分などの通り道になっている。 ・母親から生まれるとすぐに自分で呼吸を始め、うぶ声を上げる。 ・身長は平均で50cm前後で体重は約3kgである。 ・270～280日ほどの期間母親の体内で育ち、生まれてくる。 (羊水ふれない)	・母親の子宮の中で、受精卵は約280日かかってだんだんと人らしい形に育っていく。 ・子宮の中には、羊水という液があって、子は羊水の中に浮かび、へそのおと呼ばれる管で母親とつながれている。 ・へそのおと母親の体は胎盤を通してつながっている。子は胎盤を通して必要な養分などを取り入れたり、体の中の不要物を体の外に出したりしている。
・生まれたばかりの赤ちゃんでは、男女でそれぞれ性器に違いが見られるが、他のからだつきは、ほとんど同じである。 ・大人の男性は女性よりがっしりした体つきをし、女性は体全体が丸みを帯び、乳房がふくらんでいる。 ・子孫を残すために、男と女では、体のはたらきに違いはあるだろうか。	・女子と男子とでは大きく異なるにしが、体つきも違ってくる。 ・10歳をすぎるところから大人の体になる変化が現われてくる。 ・女子の体内では卵子が、男子の体内では精子が発育するようになり、次の世代に生命を残す準備が始まる。 ・外見にも変化が見られ、女子では、子に乳を与えることができるように乳房がふくらんでくる。	・男と女とでは、生まれたときから外性器のつくりの違いがみられるが、大人になるにつれて、体つきの違いははっきりしてくる。 ・女は、体全体が丸みをおび、乳房がふくらんでくる。男は体全体ががっしりしてくる。 ・男と女で体のつくりが違ったり、大人になるにつれて体つきが変化するのは、子を産み育て、大切な生命を次の世代へと受けついでいくためである。
卵巣、子宮、精そうのみでベニス、バギナの説明なし。	臍部の断面図、卵巣、子宮、精そうのみでベニス、バギナの説明なし。	卵巣、子宮、精そうのみでベニス、バギナの説明なし。

いう記述がされているが、各社の記述内容を注意深く検討してみると、次のような問題点をあげることができる。

1. 性ホルモンのはたらき

性ホルモンのからだへの作用については各社とも記述されている。心理面への作用については、学研では「性ホルモンの分泌の高まりはからだに作用するだけでなく、異性に対する関心を高めたり、性的な欲求や興味を起こしたりするなど、心理的にも作用する。これらには男女差や個人差が大きい」（P. 51）と記述され、東書では「性ホルモンの分泌がさかんになるにもなって、からだだけでなく心にも変化があらわれてくる。例えば、異性に対する関心が高まり、たがいにあこがれをいだくようになったり、性的な興味や欲求が生じたりするようになる。このような心理面の変化も、男女差や個人差が大きい」（P. 43）と記述されているが、単元後半に位置づけてある「精神の発達と心の健康」の中の「感情と意志」や「欲求や欲求不満への対応」などにおいては「異性に対する関心の高まりや性的な興味や欲求」についての記述が見られない。大日本は身体面への作用のみで、心理面への作用についての記述が見られない。

からだの成熟に伴う性的な興味や関心や欲求が旺盛になる中学生にとっては、一番悩むところであり、一番知りたいところでもあるにもかかわらず、これらについての学習が保障されていないことは大きな問題である。

2. 性器についての認識

各社とも、射精のメカニズムを説明するために男性の内性器（側面図）を、また月経のメカニズムを説明するために女性の内性器（正面図）を図式化してあるが、これらの説明にいくつかの問題点が見つけられる。

学研は、P. 50において「男女とも、陰部やわ

きの下に発毛現象みられるようになる」とか、「男女の生殖器にみられる生まれつきのちがいを一次性徴という」という記述をしておきながら、P. 52の男女の生殖器の断面図の説明においては「男子生殖器の断面図」という表現がしてある。文章においては「陰部」「生殖器」と記述し、図のタイトルには「性器」と表現しているところに、子どもは矛盾を感じないだろうか。「性器」という表現に統一したほうが、子どもの性器についての認識を育てられるのではないだろうか。

東書では、「生まれたときに、外性器の形で分けた女子と男子のちがいを一次性徴という」（P. 40）や「わきの下のまわりや生殖器のまわりに毛がはえてくる」（P. 40）と記述されているが、女性内性器の図（P. 41）や男性内性器の図（P. 42）が外性器の図なのか、内性器の図なのかの説明がされていない。大日本においては、「わたくしたちのからだは、生まれたときから卵巣と精巣、膣・子宮、陰茎などの生殖器官のちがいによって女子と男子に分かれている」（P. 53）と記述されているだけで、他には内性器や外性器などの区別の記述がされていない。

以上のような性器についての各社の記述だけで、子どもたちの自分や異性の性器についての科学的認識を育てることができるであろうか。性器についての科学的な認識を育てるためには、内性器だけでなく、外性器についての学習や“人間の性器は生殖原基から男性と女性の性器に分化したものであり、男女の違いをあらわす性器でさえも、もとは同じ一つのものである”という学習が必要であろう。また、男女それぞれの性器は、確実な受精を可能にするために合理的な構造になっていることの学習も必要となろう。

以上のような学習を保障することによって、子どもたちに自分の性器についての不安や悩み、また異性の性器についての科学的な認識を育て、性器に対するマイナスイメージを払拭し、人間の性

器が持つ真の意味を真面目に考え、「性器は自分のもの」という認識を育てたいものである。

3. 射精の起こるしくみ

射精については、精液が「からだの外に出されること」(東書)、「放出」(学研)、「射出」(大日本)される現象と、そのメカニズムについては記述されている。しかし、射精が起こる原因については、「心身の性的な刺激によって」(学研 P.52)や「強い刺激を受けた後」(大日本 P.56)と記述されているだけで、子どもにはわかりにくい記述である。東書には記述がされていない。射精の形態については、学研と大日本が「夢精」については説明しているが、「遺精」「自慰」「性交」については各社とも記述がない。

また、勃起についての記述は各社ともなく、勃起の原因とそのメカニズムや、勃起と射精との関係についての科学的な認識は育てられないだろう。

4. 月経の起こるしくみ

月経が起こるメカニズムについては、各社とも女性の内性器の図や月経周期の模式図を使って説明しているが、「経血量」や「月経期間」についての記述が明確にされていない。これらについての十分な学習をすることによって月経予定日の予測をすることができるし、また生活設計をしていく上でも必要不可欠な学習になろう。

5. 射精や月経が起こる身体に成長したことの意味

子どもたちが射精や月経が起こる原因やそのメカニズムを理解することは必要である。しかし、子どもたちに、自分自身の身体や異性の身体に射精や月経が起こることの意味を理解させることはもっと重要である。この点について、学研では「二次性徴発現の意味と生命誕生」のところで「二次性徴が発現し、月経や射精が起こるのは、

わたしたちのからだが生み出すことのできるおとなのからだに成長しているしるしであり、健康な発達をとげている証拠なのである」(P.53)とし、東書では「月経」のところで「月経がはじまるのは、卵巣が発達してきていることを意味し、新しい生命を生み出す準備がはじまっているしるしである」(P.41)とし、「射精」のところで「精通を経験することは、精子がつくられるようになったことを意味しており、新しい生命をつくり出す準備がはじまっているしるしである」(P.42)としてある。大日本は記述がない。

以上のような表現よりも、「射精が起こる身体に成長してきたことの意味は、女性を妊娠させる可能性のある自分自身に成長したことである」とか「月経が起こる身体に成長したことの意味は、妊娠する可能性のある自分自身に成長したことである」というように、明確に子どもたちに確認させる必要があるのではなからうか。このような確認をもとにして、「性交」や「避妊」の学習に発展させたいものである。

6. 受精なき性交

「受精」という文言は各社とも使っているが、「性交」という文言は各社とも使われていない。中学生に対しても「性交」についての学習が保障されないのである。

小学生の頃から子どもたちが知りたいと思っていた「男の精子をどのようにして、女の身体に送り込むのだろうか」という疑問について、中学生になった子どもたちにも答えられない教科書になってしまっているのである。「性交」についての学習を子どもたちに保障しないことには、男女の性器の構造や機能の合理性について理解させることができないばかりでなく、「エイズ」やその感染予防についての学習さえも、十分な学習を保障できないのではなからうか。

(4) 「精神の発達と心の健康」について

「精神の発達と心の健康」においては、「中学生期の精神の発達の特徴」や「欲求と心の健康」などについての学習を展開させるようになっているが、子どもたちの「性についての悩み」や「性衝動」や「異性にひかれる心」などについてのリアルな現実とかかわった学習を十分に保障することができない教科書になっているように思われる。

この単元で、とりわけ子どもたちの知りたいこと、学習したいことは、「異性にひかれる心」であり、「異性の心理」についての学習なのである。「中学生期の心理的発達の特徴」の中核的なものとしての「性にかかわる心理的な発達や欲求や葛藤」を曖昧にした「心の発達」や「心の健康」の学習では、子どもたちのニーズには十分に答えられないものになってしまうのではなかろうか。

また、中学生男子の自慰経験率が急激に増加する時期に「射精・精通」の学習の発展として「自慰」についての学習をきちんと位置づけ、子どもたち自身の性衝動とそれに対する対応方法につい

ても、積極的、重点的に位置づける必要があるのではなかろうか。

(5) 「エイズとその予防」について

「疾病の予防」の単元においては、「結核」「喫煙、飲酒、薬物の乱用と健康」「急病の応急処置」について取り上げられているが、現代の国民的な課題である「性行為感染症」とりわけ「エイズ」については、学習内容としては完全に欠落しているのである。若年層においてもエイズをはじめとする性行為感染症の急激な増加が見られる現在、健康教育としての保健学習の中に「エイズ」をはじめとする性行為感染症の学習を欠落させていることは、大きな問題点として指摘しておきたい。

参考文献

- 1) 朝山新一「性教育」(1967年 中公新書)
- 2) 村松博雄「これからの性教育」(1970年 明治図書)
- 3) 総理府「青少年の性行動」(1974年)